

國學院大學學術情報リポジトリ

〔研究ノート〕 通常学級教員が生徒指導の難しさを感じる特別な教育的支援を必要とする児童生徒の特徴に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 雅俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001372

[研究ノート]

通常学級教員が生徒指導の難しさを感じる特別な教育的支援を必要とする児童生徒の特徴に関する研究

渡邊 雅俊

【要旨】

本研究は、通常学級教員が生徒指導の難しさを感じる特別な教育的支援を必要とする児童生徒（SEN児）の特徴について、主たる困難とその内容を検討した。小・中学校の通常学級教員のうちSEN児の担任経験者を対象とした調査から、思春期（小学校5年生～中学校3年生）では、「心理」に関わる困難を抱えている児童生徒が児童期に比べて多い傾向が見られた。テキストマイニングによる自由記述の分析の結果、児童期は「学習能力・態度に対する指導の難しさ」と「行動・コミュニケーションに対する指導の難しさ」といった内容が見出された。他方、思春期では「家庭生活に対する指導の難しさ」「学校生活に対する指導の難しさ」「対人関係に対する難しさ」といった内容が抽出された。

【キーワード】

生徒指導, 特別な教育的支援を必要とする児童生徒, テキストマイニング

はじめに

平成19（2007）年4月に改正学校教育法が施行され、小・中学校の通常学級においても、発達障害のある児童生徒を対象とした特別支援教育が明確に位置付けられて久しい。その発達障害を中心とする特別な教育的支援を必要とする児童生徒（以下、SEN児：students with special educational needs）¹⁾が、通常学級に6.5%ほど在籍すると推定されている（文部科学省, 2012）。通常学級教員の多くも、そのような子どもが増加していると実感している（例えば、関口, 2010）。最近の文部科学省（2016）によれば、特別支援教育コーディネーターの配置、校内委員会の設置、個別的教育支援・指導計画書の作成、教職員研修などの実施率が向上し、特別支援教育制度が着実に推進されているとの報告がある。

しかしながら、教員側の捉え方には相違が見られる。数多くの研究において、通常学級教員が、SEN児の対応に苦慮している現状が明らかにされている（レビューとして、別府, 2013；大山・金井, 2015）。主な背景として、特別支援教育の捉え方や取り組みに教員間の差異が見られ、SEN児対応の要である連携や信頼関係を形成し難い状況にあることが指摘されている（米沢・岡本・林,

2011)。また、最近では教員のニーズが単なる障害理解から実践的指導技術に変容していることが示唆され、それに研修内容が十分に応じていないといった点も指摘されている（藤瀬, 2014 ; 臼井・高木, 2012 ; 八木, 2014)。

以上のように、体制整備に関する課題が浮き彫りになっている一方、教育実践の中心的位置にある生徒指導に関する知見が、ほとんど示されていない。生徒指導は「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のこと」と定義されている（文部科学省, 2010)。深刻な発達的問題を抱えるSEN児にとって、担任教員の生徒指導の考え方や実践力は重要である。例えば、中井（2006）は、中学生の教員に対する信頼感にソーシャル・サポートの認知が影響することを明らかにした。つまり、生徒が教員に対して「あなたが落ち込んでいると、元気づけてくれる」「一人ではできそうにない課題があったときは、快く手伝ってくれる」「あなたが学校での人間関係に悩んでいると知ったら、いろいろと解決方法をアドバイスしてくれる」²⁾ 等のような働きかけを行ってくれると捉えているほど、信頼感を高めるのである。このようなソーシャル・サポートは、教員による生徒指導の範疇において実践されるものであろう。従って、生徒指導の内容を明らかにすることは、教員とSEN児との関係性の現状と課題を検討するうえで重要な知見になり得る。

SEN児を含めた児童生徒全体における生徒指導は、次のように概括できる。小・中学校、高等学校の全ての学校種において、教員のストレス要因の第一位が、生徒指導に関する悩みや不安である（文部科学省, 2013)。多くの教員は、生徒指導を個別に行うことに対し、忙しさや負担を感じており（文部科学省, 2006)、近年、それに費やされる時間が漸次的に長くなっている（青木・神林, 2013)。特に小学校教員よりも中学校教員のほうが、生徒指導における困難を抱える傾向がある（三沢, 2011 ; 内田・井上, 2007)。長谷（2014）は、中学校教員のバーンアウトを防ぐためには、生徒指導上の危機に対するサポートが必要だと指摘している。小学校教員も不登校やいじめ、児童間暴力の生徒指導における難しさを感じているが、そのような要援助児童と関わるのが自己成長の機会であると前向きに捉える傾向があることが報告されている（山崎, 2017)。

SEN児に焦点を置いた生徒指導に関して、国立教育施策研究所（2015）が、発達障害等のラベルを貼って他の児童生徒と切り分ける問題対応型の発想について注意を喚起し、他児より「つまずきやすい児童生徒」という理解が大切であると指摘している。そして、そのような「つまずきやすさ」に対して、個に即した助言や支援を行う、取り出し授業や補習授業を行う等の「個別支援」と「つまずきやすい児童生徒」だけでなく、全ての児童生徒が互いの特性等を理解し合い、助け合って共に伸びていこうとする集団づくりを進める、分かりやすい授業づくりを進める等の「集団指導」とのバランスを取りつつ、生徒指導を進めていくことを推奨している。また、生徒指導の基本書である「生徒指導提要」を検討した齋藤・池田（2016）によれば、発達障害のある児童生徒については、「児童期における発達障害」「思春期における発達障害」「問題行動と発達障害」「発達に関する課題と対応」の項で扱われていると解説している。そして、特に実態把握

やアセスメントの重要性を指摘し、発達障害の特性の多くは、他児にも多く見られるため、本人の努力不足や環境の影響という誤った理解がなされてしまう危険性を防ぐことができると考察している。生徒指導における現状に関しては、不登校の小・中学生のなかで、SEN児の占める割合は20.2%、非行行為の中学生になると30.7%を占め、児童生徒全体の在籍率6.5%を大きく上回っている可能性が指摘されている（原田ら, 2012；原田・松浦, 2010）。これらの知見は、SEN児が生徒指導上の重大な問題を抱えやすいことを示唆するものであろう。

上述した知見は、SEN児に対する生徒指導の骨子や概況に関するものであり、その内実までに踏み込んだものではない。教員が生徒指導の視点からSEN児をどのように捉えているかについて分析することで、生徒指導の教育実践における実態とその課題が明示できると考える。そこで、本研究では、通常学級教員が生徒指導の難しさを感じる問題とその内容について、発達期（児童期・思春期）による相違に焦点を置いて検討する。思春期以降の多くのSEN児は、自己肯定感の低下から生き難さを認識し、それに起因する精神や行動の多様な困難が顕在化する時期である（金生, 2015）。このことは、彼らを担任する教員が感じる生徒指導の難しさにも影響を及ぼすのではないだろうか。従って、SEN児の生徒指導の難しさの特徴は、児童期と思春期では変容が見られると予測する。

方 法

1.対象者と手続き

著者が担当したY県の教員対象の研修会において、SEN児の定義¹⁾や現状を解説した後、全参加者147名に対して調査用紙を配布した。回答時間は、15～20分程度であった。最終的な調査対象者となったのは、調査用紙の質問項目に「生徒指導の難しさを感じるSEN児の担任経験がある」と答えた公立小学校と中学校の通常学級教員108名（小学校教員88名、中学校教員20名）であった。内訳は、女性61名、男性47名であり、教職経験は1～5年21名、6～10年27名、11～15年30名、16～20年9名、20年以上21名であった。なお、本研究では、全参加者を母集団とした分析は行わない（例えば、「生徒指導の難しさを感じるSEN児の担任経験者の割合」等）。この理由は、著者の担当した研修が特別支援教育の専門的スキルに関わる内容であり、参加した教員の多くは、SEN児の教育実践に関心を有する者で占められ、教員の母集団としては、経験やスキル等に偏りがあると推定されるからである。

2.調査項目

(1) 生徒指導の難しさを感じるSEN児の全体的特徴

生徒指導の難しさを感じたSEN児1名（複数名を担当した場合は最も難しいと感じた1名）について、性別、学年、障害の診断の有無の他に、主な困難を「学習」「対人関係」「行動」「心理」「保護者」のなかから選択して貰った（複数選択可）。

(2) 生徒指導の難しさの内容

当該SEN児に対する生徒指導の難しさの内容について具体的に記述してくださいと尋ねた（自

由記述)。

3.研究倫理上の配慮

著者は、調査開始前に、調査の回答は任意であることと調査の目的、調査結果の取り扱い、回答内容における個人情報の保護について説明した。加えて、調査用紙には回答欄を設け、説明に対して承諾の意思を確認された参加者を調査対象者とした。

結果と考察

対象者が「生徒指導の難しさを感じるSEN児」として選定した児童生徒108名の内訳は、男子85名、女子23名であった。学年は小学1年生12名、2年生22名、3年生11名、4年生7名、5年生18名、3年生18名、中学1年生6名、2年生7名、3年生7名であった。本研究では、発達期による相違を検討するために、児童期を小学1年生から小学4年生までと見なした（児童期, 52名）。思春期は小学5年生から中学3年生までとした（思春期, 56名）。このうち、障害の診断の有る者は、児童期16名（30.7%）、思春期33名（58.9%）であった。なお、この発達期の区分は、笠井（2015）による「思春期が10歳前後から始まる急激なホルモン変化による心身への影響を特徴とする時期」という定義に基づいている。

1.生徒指導の難しさを感じるSEN児の主な困難

Table1に、通常学級教員が生徒指導の難しさを感じるSEN児における主な困難毎の該当数とその割合（複数回答可）を発達期別に整理した。児童期を見ると「学習」20名（38.4%）、「対人関係」24（46.1%）、「行動」26（50.0%）、「心理」10（19.2%）、「保護者」7（13.4%）であった。思春期では「学習」19（33.9%）、「対人関係」25（44.6%）、「行動」21（37.5%）、「心理」31（55.3%）、「保護者」6（10.7%）であった。思春期のSEN児において「心理」に関わる困難を抱えている者が、児童期に比べて多い傾向が見られた。このことは、通常学級教員がSEN児の思春期における「心理」的問題に対する生徒指導に難しさを感じている現状を示唆するものであろう。

Table 1 通常学級教員が生徒指導の難しさを感じるSEN児の主な困難毎の該当数とその割合（複数回答可）

	SNE児数	学 習	対人関係	行 動	心 理	保 護 者
児童期 ¹⁾	52	20(38.4)	24(46.1)	26(50.0)	10(19.2)	7(13.4)
思春期 ²⁾	56	19(33.9)	25(44.6)	21(37.5)	31(55.3)	6(10.7)

1) 小学1年生から小学4年生

2) 小学5年生から中学3年生

2.生徒指導の難しさの特徴

対象者の自由記述の内容分析は、テキストマイニング用ソフト「KH Coder (ver.2.00f)」(樋口,

2004；樋口, 2014) を用いた。初めに、生徒指導の難しさについて自由記述から簡明に特徴づけることを目的として前処理を行った。自由記述から抽出された語のうち、一般的に用いる語や明らかに生徒指導の難しさの内容とは、直接的に関係ないと考えられる語 (e.g., とても, 何となく, 例えば, ある程度, 思う) を除外した。この一方, KH Coderで抜き出さない語 (e.g., 自己肯定, 自尊感情, 保護者) については、それらを強制的に抽出するように設定した。また、同義語・類義語は、可能な限りコーディングによって統一した (e.g., 「友人」「仲間」「友だち」「友達」= 「友達」, 「勉強」「学習」= 「学習」) このような処理を施したところ、対象となった文章数は児童期222、思春期228が確認された。総抽出語数(総異なり語数)は児童期1,204 (425)、思春期1,396 (468) となった。

(1) 生徒指導の難しさの抽出特徴語における出現人数(割合)

本研究では、生徒指導の難しさの特徴づける抽出語(以下、抽出特徴語)を各発達期のSEN児の総人数のうち1割以上に出現した語と定めた。その結果、児童期は33語、思春期では32語が見出された。児童期の抽出特徴語において、特に出現人数(割合)が多かった(2割以上)語は、「集団20名(38.4%)」「落ち着く18名(34.6%)」「学習17名(32.6%)」「多い16名(30.7%)」「理解14名(26.9%)」「苦手12名(23.0%)」「指示11名(21.1%)」等であった。他方、思春期では「不安定24名(42.8%)」「自信23(41.0%)」「低い23名(41.0%)」「多い17名(30.3%)」「学習14名(25.0%)」「友達14名(25.0%)」「気持ち12名(21.4%)」「保護者12名(21.4%)」等であることが分かった。

(2) 抽出特徴語の出現パターンからみた生徒指導の難しさの特徴

発達期別に階層的クラスタ分析(Ward法, Jaccard距離)を行い、抽出特徴語の出現パターンが近似するもの同士を組み合わせた類型化を試みた。これらの類型から、児童期と思春期毎の生徒指導の難しさについて考察する。

1) 児童期：児童期は6個のクラスタ(Figure1)に分類された(括弧下線が抽出特徴語)。

クラスタ1は、「苦手」「問題」「個別」「授業」「集中」の語が分類された。実際の自由記述では【「苦手」な国語の時間になると、「授業」に「集中」できない(小学2年生男子)】【行動上の「問題」が気になり、「個別」に指導してはいるのですが、なかなかうまくいきません(小学3年生男子)】等が見られた。

クラスタ2は、授業中に「分かる(らない)」「多い」「認知」「覚える(られない)」「低い」「学習」「見る」「動機」といった語がまとまった。ここでは、【「見る」力が弱くて、「覚える」ことができない。最近では、「学習」への「動機」も「低く」なっている(小学4年生男子)】【授業で「分からない」ことが「多い」ので、「認知」の発達に遅れがあるようです(小学2年生男子)】といった記述が示されていた。

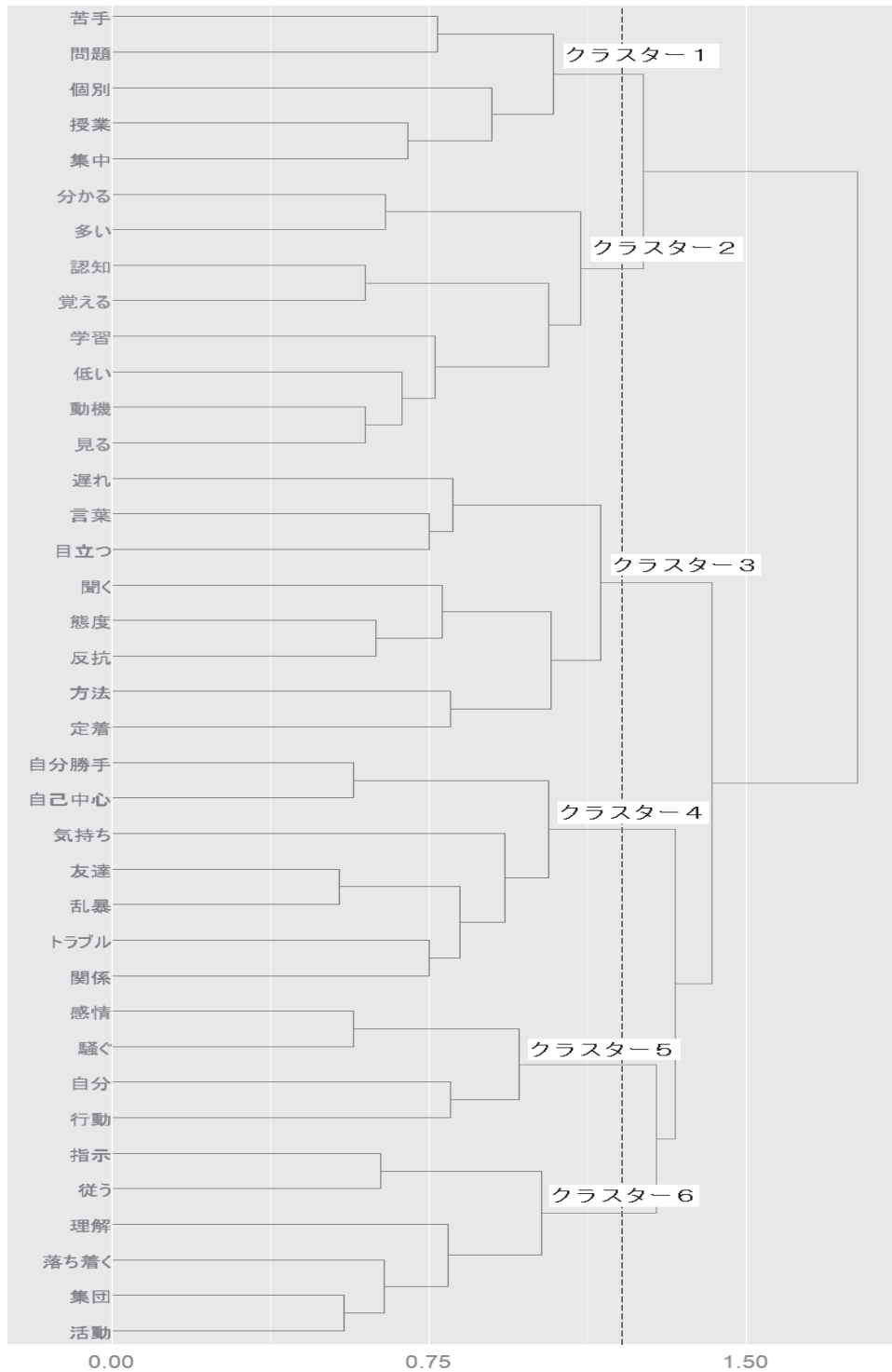


Figure 1 児童期のクラスター分析の結果

クラスター3は、「遅れ」「言葉」「目立つ」「聞く（かない）」「態度」「反抗」「方法」「定着」等の語の集まりとなった。自由記述を見ると、【「言葉」の「遅れ」が「目立ち」、話を理解できるがコミュニケーションが苦手（小学1年生女子）】【「反抗」的な「態度」で、教員の話「聞かない」。いろいろな「方法」を試みるが、良くなったり、悪くなったりで「定着」しない（小学4年生男子）】といった内容が記されていた。

クラスター4は、「自分勝手」「自己中心」「気持ち」「友達」「乱暴」「トラブル」「関係」等の語が分類された。実際の内容は、【他者の怒りを買うような「自分勝手」「自己中心的」なふるまいが多く、「友達」に「乱暴」する（小学3年生男子）】【相手の「気持ち」を理解できないので、喧嘩やいざごごといった対人「関係」の「トラブル」が絶えない（小学2年生男子）】という記述が見られた。

クラスター5では、「感情」「騒ぐ」「自分」「行動」といった語が集まった。自由記述では【泣いたり、暴れたり、「騒ぐ」ことが日常的にあり、「感情」を抑えることができない（小学4年生男子）】【「自分」の思いと違うことが起きると、泣いてわめき散らす「行動」が止められない（小学1年生男子）】という内容が記されていた。

クラスター6は、「指示」「従う（わない）」「理解」「落ち着く（かない）」「集団」「活動」等の語が分類された。自由記述の内容は【「指示」に「従わない」し、話が「理解」できていない（小学1年生女子）】【「集団」での「活動」になると、さらに「落ち着かない」、少し目を離すとどこかへ行ってしまう（小学2年生男子）】等の記述が見られた。

以上のクラスター分析の結果を検討すると、通常学級教員から捉えた小学1年生から4年生までの児童期における「生徒指導の難しさを感じる児童生徒の特徴」は、クラスター1と2の「学習能力・態度に対する指導の難しさ」と、クラスター3と4、5、6による「行動・コミュニケーションに対する指導の難しさ」に集約できると考える。「学習能力・態度に対する指導の難しさ」は、SEN児が示す学習の基盤である認知発達における遅れや偏りに応じた指導や、授業への集中力や遂行の安定性、動機づけを維持する指導の難しさをとった内容である。また、「行動・コミュニケーションに対する指導の難しさ」は、教員が指導の際に、仲間関係や集団活動において自己中心性や攻撃性を抑制することや、他者理解や指示理解を促すことが難しいとする内容である。

2) 思春期：思春期は6個のクラスター（Figure2）が見出された（括弧下線が抽出特徴語）。クラスター1は、「登校」「問題」「保護者」「家庭」「協力」「生活」「精神」等の語が分類された。自由記述の内容は、【「登校」渋りがあり、些細なことで傷つきやすいという心の弱さの「問題」を抱えている（中学2年生男子）】【「保護者」のネグレクト傾向で、「精神」的に不安定で「生活」リズムも悪くなる一方だが、「家庭」不和に「協力」を求めることができない（中学1年生男子）】といった内容が記されていた。

クラスター2は、「自己肯定」「低い」「動機」「成績」「学習」といった語が集まった。自由記述では、【気持ちの不安定やうつ、不安の強さ、「自己肯定」感の「低さ」、自尊感情の低さ、などの特徴

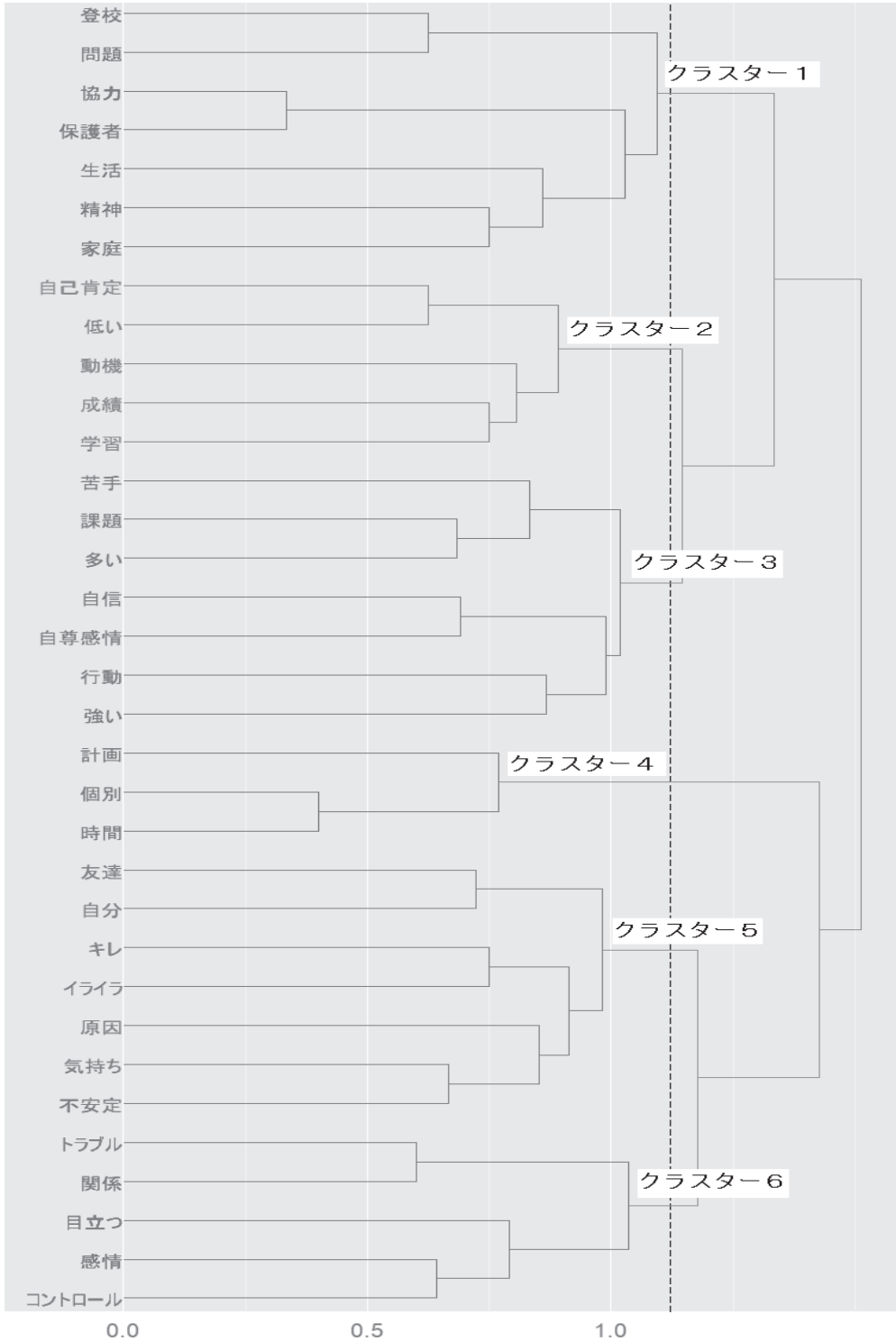


Figure 2 思春期のクラスター分析の結果

を持つ生徒である（中学3年生女子）【学習の動機が低く、やればできると思うのですが、成績は低空飛行の状態です（小学6年生男子）】といった内容が記されていた。

クラスター3は、「苦手」「課題」「多い」「自信」「自尊感情」「行動」「強い」等の語が分類された。自由記述を見ると、【運動が「苦手」、学習成績も低い、基本的習慣が身につけていない、と「課題」が「多過ぎ」る。周りに比べて不得意が多いので、「自尊感情」が低い（小学5年生男子）】【こだわりが「強く」、思い通りにならないと暴言や攻撃的「行動」を見せてしまうこと、などに対して、自分で反省できるので、その度に「自信」を失う（中学1年生男子）】等が記されていた。

クラスター4は、「計画」「個別」「時間」等の語がまとまった。【不安定な生徒に対しては、集団での指導には限界があり、「個別」で「時間」をとって指導する必要があるが、どのように計画すればよいか分からない（中学3年生男子）】といった記述が示されていた。

クラスター5は、「友達」「自分」「キレ」「イライラ」「気持ち」「不安定」「原因」といった語が分類された。教員の自分記述には【感情をうまく抑えることが苦手なようで、カーッとすると、つい「友達」が傷つくことと言ってしまい、罪悪感で「自分」を苦しめるという特徴があります（中学3年生女子）】【「イライラ」、「キレる」という特徴があり、「気持ち」が「不安定」なのが「原因」になっている。時間をつくって、個別で話し合いをしながら、どうにか安定させている状態（小学5年生）】といった内容が記されていた。

クラスター6では、「トラブル」「関係」「目立つ」「感情」「コントロール」等の集まりとなった。【異性「関係」や友達との「トラブル」が多く、クラスに馴染めず、距離を置かれている状態（中学2年生女子）】【心の問題が「目立つ」子どもで、「感情」の「コントロール」がうまくできず、イライラしたり、落ち込んだりの波が激しく、保健室と教室を行ったり来たりしている（小学6年生女子）】

以上から、小学5年生から中学3年生までの思春期では、クラスター1の「家庭生活に対する指導の難しさ」とクラスター2と3の「学校生活に対する指導の難しさ」、クラスター4と5、6による「対人関係に対する指導の難しさ」として整理できるだろう。「家庭生活に対する指導の難しさ」は、精神的不安定さや不登校の背景にある生活リズムの乱れへの指導や問題のある保護者への対応の難しさを見出すことができる。「学校生活に対する指導の難しさ」は、苦手なことや課題とされることから、自己肯定感や自尊感情が低下しないための指導の難しさを感じているといった内容である。「対人関係に対する指導の難しさ」の内容は、友達や異性との関係性において生じるトラブルを回避するために、気持ちの不安定さや感情のコントロールを指導することや、その実現のために個別指導の時間を取ることや計画することの難しさが特徴と言える。

総合考察

本研究は、通常学級教員が生徒指導の難しさを感じるSEN児の特徴を検討するために、主たる

困難とその内容を明らかにすることを目的とした。小・中学校の通常学級教員のうちSEN児の担任経験者を対象とした調査から、思春期（小学校5年生～中学校3年生）では、「心理」に関わる困難を抱えている児童生徒が、児童期に比べて多い傾向が見られた。また、生徒指導の難しさの内容に関する自由記述をテキストマイニングによって分析した結果、以下のような内容が明らかとなった。

児童期では、「学習能力・態度に対する指導の難しさ」と「行動・コミュニケーションに対する指導の難しさ」が見出された。具体的には、認知発達の遅れや偏り、授業の集中力や遂行の安定性、動機づけの維持を促す指導や、仲間関係や集団活動において自己中心性や攻撃性を抑制したり、他者理解や指示理解を促したりする指導において難しさを感じていることが示唆された。

他方、思春期は、「家庭生活に対する指導の難しさ」「学校生活に対する指導の難しさ」、「対人関係に対する難しさ」に主な問題として抽出された。これらの問題に通底していることは、精神的不安定さや自己肯定感と自尊感情の低下、感情のコントロールといった心理的問題に対する指導の難しさを感じているところであろう。加えて、生活リズムの乱れや保護者への対応といった家庭に関する指導の難しさが顕在化していることも特徴である。

以上から、通常学級教員から見たSEN児の生徒指導の難しさは、児童期と思春期とでは相違があると推察できる。発達障害のある児童生徒に焦点を置いた研究によれば、児童期は、SEN児が有する発達障害等の一次的障害が学習や集団活動、仲間関係における行動特性となって現れ、躓きや失敗を繰り返してしまう者も多いことが指摘されている。それが、思春期になると、家庭や学校、対人関係において苦手意識や挫折感を高める要因となり、心理的問題や精神的不安定といった二次的障害へと発展していくことになる（例えば、金生, 2015；齋藤・池田, 2016）。

本研究は、通常学級教員が、これらの内容を生徒指導上の難しさとして捉えていることを確認できたことと、その具体的な内容を一定程度明らかにできた点が成果と言えるだろう。特に思春期における指導の難しさについて、問題が学校から家庭へ、仲間に加えて異性へと広がるうえ、心理・精神的状態が悪化するといった深刻さが加わっている現状が示唆された。このような問題に対する不適切な生徒指導は、生徒の心身の健康に取り返しのつかない影響を与えることもある。通常学級教員は、児童生徒の心理的問題に対して特別支援教育の知識やカウンセリングの技法を習得し、生徒指導に活かすことが望ましい。しかし、経験の少ない教員ほど、このような特別な配慮に抵抗感を持つ傾向にあり、そのことが教員自身のメンタルヘルスに悪影響を与える可能性が指摘されている（宮木, 2015）。それらの教員に対しては、SEN児の理解や指導に関する研修や相談といったサポート体制の拡充による支援が必要である。

本研究の結果は、特別支援教育に関心のある通常学級教員を対象とした間接データであること、SEN児のサンプルが少ないことが主な問題点として指摘できる。また、指導によって、SEN児がどのように変容したかといった詳細について踏み込めていない。これらの点を補完した分析を行うことで、生徒指導の実態とより明確にできると考える。

注1) 知的発達の遅れはないが、発達障害が想定され、学習面や不注意又は多動性、衝動性、対人関係やこだわり等のいずれか又は複数の領域に著しい困難を示す小学生と中学生を指す（文部科学省, 2012）。実際は、文部科学省の調査は、教員による評価であり、発達障害が中心であるものの、その周辺（軽度の知的障害や精神障害、親子関係の問題）の児童生徒も含まれていると推定される。

注2) 中井（2006）で採用された久田・千田・箕口（1989）による学生用ソーシャル・サポート尺度の項目にある16場面から抜粋した。

文 献

- 青木栄一・神林寿幸（2013）2006年度文部科学省「教員勤務実態調査」以後における教員の労働時間の変容。東北大学大学院教育学研究科研究年報, 62（1）, 17-44.
- 別府悦子（2013）特別支援教育における教師の指導困難とコンサルテーションに関する研究の動向と課題。特殊教育学研究, 50（5）, 463-472.
- 原田直樹・松浦賢長（2010）学習面・行動面の困難を抱える不登校児童・生徒とその支援に関する研究。日本保健福祉学会誌, 16（2）, 12-32.
- 原田直樹・野見山春香・三並めぐる・梶原由紀子・松浦賢長（2012）中学校における発達障害が疑われる生徒に対する生徒指導に関する研究。福岡県立大学看護学研究紀要, 10（1）, 1-12.
- 樋口耕一（2004）テキスト型データの計量的分析-2つのアプローチの峻別と統合-。理論と方法（数理社会学会）, 19（1）, 101-115.
- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-。ナカニシヤ出版。
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博（1989）学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み（1）。日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 金生由紀子（2015）発達障害。長谷川寿一（監修）笠井清登・藤井直敬・福田正人・長谷川眞理子（編集）思春期学（pp.240-150）。東京大学出版会。
- 笠井清登（2015）総合人間科学としての思春期学。長谷川寿一（監修）・笠井清登・藤井直敬・福田正人・長谷川眞理子（編集）思春期学（pp.1-17）。東京大学出版会。
- 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター（2015）生徒指導リーフ「発達障害と生徒指導」。(<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf03.pdf>, 2017.0620)
- 三沢 元彦（2011）小・中学校教師のメンタルヘルスの規定因：小中男女の比較を通して。法政大学大学院紀要, 67, 215-228.
- 宮木秀雄（2015）小学校教師の特別支援教育に関するイラショナル・ビリーフがメンタルヘルスに及ぼす影響。

通常学級教員が生徒指導の難しさを感じる特別な教育的支援を必要とする児童生徒の特徴に関する研究（渡邊）

山口学芸研究, 6, 55-66.

文部科学省（2006）平成18年度「教員意識調査」「保護者意識調査」文部省委嘱調査. 株式会社リクルートマネジメントソリューションズ.

文部科学省（2010）生徒指導提要. 教育図書.

文部科学省（2012）平成24年教員のメンタルヘルスに関する調査結果 文部科学省委嘱調査. 三菱総合研究所.

文部科学省（2012）「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒」に関する調査結果について.

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/__icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf, 2017.3.08)

文部科学省（2013）教職員のメンタルヘルス対策について（最終まとめ）. (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2013/03/29/1332655_03.pdf, 2017.06.15)

文部科学省（2016）平成28年度特別支援教育体制整備状況調査結果について. (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/__icsFiles/afieldfile/2017/04/07/1383567_02.pdf, 2017.06.14)

中井大介・庄司一子（2006）中学生の教師に対する信頼感とその規定要因. 教育心理学研究, 54, 453-463.

大山 卓・金井篤子（2015）特別支援教育に携わる小中学校教員のストレスとサポート体制の研究展望. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 62, 83-95.

関口昌秀（2009）軽度発達障害と思われる子と学校教師. 神奈川大学心理・教育研究論集, 29, 107-120.

内田利広・井上篤史（2007）教員の生徒指導に関わる意識と実態調査－児童生徒の抱えている解決困難な課題をできるだけ早期に克服するために－. 京都教育大学紀要, 110, 75-92.

山崎宣次（2017）生徒指導に関する現場教員の意識. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部 教育実践研究, 2, 17-24.

付 記

本研究の一部は、日本発達障害学会第52回大会（2017年8月, 国立重度知的障害者総合施設のぞみ園）において発表しました。

（わたなべまさとし 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）